

平成30年度

中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための
指導方法等に関する実証研究

平成30年度事業報告書

国立大学法人

信州大学

平成31年3月

目次

1	はじめに—本事業の背景、目的・概要、取組の特徴—	3
	1.1 本事業に関する課題・ニーズ・背景・目的	3
	1.2 本事業の取組の全体像	4
	1.3 本事業の取組の特徴	5
2	平成 30 年度事業報告(概要)と成果報告(概要)	6
	2.1 平成 30 年度事業概要・計画	6
	2.2 平成 30 年度事業概要・計画の進捗状況	7
	2.3 外部評価委員会による評価	17
3	平成 30 年度の会議、授業観察、研究会等参加の記録	19
	3.1 会議の記録	19
	3.2 授業観察の記録	21
4	「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標	23
資料	平成 30 年度事業の体制		

1. はじめに—本事業の背景、目的・概要、取組の特徴—

文部科学省委託事業「平成 30 年度中学校・高等学校における英語教育の抜本的改善のための指導方法等に関する実証研究」の事業の目的は、中・高等学校における英語教育の抜本的改善のため、先進的な指導方法・体制、ICT教材・指導資料作成等の実証研究を実施することである。国立大学法人信州大学は、平成 28 年 7 月よりこの事業を受託し推進してきた。本報告書は、平成 30 年度の事業の内容を報告するものである。

ここでは、信州大学の事業の背景、目的と概要、取組の特徴を紹介する。

1.1 本事業に関する課題・ニーズ・背景・目的

「今後の英語教育の改善・充実方策について(報告)」(平成 26 年 9 月 26 日英語教育の在り方に関する有識者会議)では、中学校・高等学校の英語教育について、「中・高等学校では、生徒の理解の程度に応じて、授業を英語で行うことを基本とする」ことと、「各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4 技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から学習到達目標(例:CAN-DO 形式)を設定し、指導・評価方法を改善する」ことが提案されている。英語教育の目標がコミュニケーション能力を身に付けさせることでありながら、多くの場合「英語を用いて何ができるようになったか」よりも「文法や語彙等の知識がどれだけ身に付いたか」という観点で授業が行われている実態があり、ここに改善の必要があると指摘したものである。また、「論点整理」(平成 27 年 8 月 26 日中央教育審議会教育課程企画特別部会)では、次期学習指導要領の改訂の方向性として、三つの柱を踏まえつつ、①各学校段階の学びを接続させること、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標(4 技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を設定し、学習・指導方法、評価方法の改善・充実を図っていくことを求めている。さらに、中央教育審議会外国語ワーキンググループでは、①「何を知っているか、何ができるか」という個別の知識・技能、②「知っていること・できることをどう使うか」という思考力・判断力・表現力等、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という学びに向かう力や人間性という 3 つの柱の点から、外国語活動・外国語科において育成すべき資質・能力を検討すると共に、各学校が適切に学習到達目標を設定し、育成すべき資質・能力の達成状況を把握できるように、具体的に国の指標形式の目標を技能ごとに設定することを検討している。

このような状況において、長野県では、中学校については、平成 26 年度に「英語力を強化する指導改善事業」として長野県教育委員会が「長野県中学校 CAN-DO リスト作成委員会」を構成し、「長野県中学校 CAN-DO リスト(平成 26 年度モデル)」を作成した。また、リストについての概要を説明した『長野県中学校 CAN-DO リスト作成の手引き(平成 26 年度版)』も作成し、これらは平成 26 年度末に各学校に配布された。各中学校は、これらのモデルや手引きを参考にしながら、「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成を進めているところである。また、平成 25 年度から平成 27 年度まで、長野県教育委員会教学指導課により、大学と連携した研修プログラム「英語中核教員(CET)養成プログラム」が実施された。CET とは、Core English Teacher の略である。大学と連携した年間 10 回の研修が実施され、指導力向上のために、「CAN-DO リストの形の学習到達目標の理解」を核としながら授業改善に取り組んだ。高等学校については、平成 25 年度に長野県教育委員会により作成された「長野県高等学校 CAN-DO リスト」に基づいて、各高等学校が「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成を進めている。また、平成 26 年度より「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の指定を受け、英語指導力の向上の取組を行っている。

「平成 27 年度英語教育実施状況調査」(平成 28 年 4 月 4 日文部科学省)によれば、長野県の状況は以下の通りであった。第 1 に、「CAN-DO リスト」による学習到達目標の設定状況は、高等学校(普通科)は 84.2%、中学校は 22.5% であった。このことから、長野県では、高等学校においては「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の設定は進んでいるが、中学校においては進んでいない状況が示された。第 2 に、授業における英語担当教員の英語使用状況(発話の半分以上を英語で行っている教員の割合)は、高等学校(普通科等のコミュニケーション英語 I 担当)は 31.1%、中学校(3 年生担当)は 57.4% であり、高等学校において、教員の英語使用が少ないことが示された。このことは、高等学校の授業において、教員も生徒も英語を使用する機会(すなわち言語活動の機会)が少ないことを示唆している。第 3 に、生徒の英語力の状況は、高等学校(普通科等の 3 年生)では英検準 2 級以上を取得している生徒

及び英検準 2 級以上相当の英語力を有すると思われる生徒の割合は 34.4%であり、中学校(3 年生)では英検 3 級以上を取得している生徒及び英検 3 級以上相当の英語力を有すると思われる生徒の割合は 33.7% であった。いずれも、「第 2 期教育振興基本計画」(平成 25 年 6 月 14 日閣議決定)で示された 50%という基準には達していなかった。

以上のことから、長野県においては「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を核としながら授業改善を図る取組が進められてきているものの、次の課題を有していることが指摘できる。

課題 1: 中学校における「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の設定が遅れている。

課題 2: 中学校・高等学校において「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標に基づく授業方法や評価方法の改善が進んでいない。

課題 3: その結果として、生徒の英語力の育成について、成果が上がっていない。

この課題を踏まえて、信州大学が長野県教育委員会及び軽井沢町教育委員会と連携をとり、本事業を計画した。本事業は、次期学習指導要領の目標案、国の指標形式の目標案及び CEFR 等を共通参照枠として、言語活動の高度化を図った「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を作成し、その目標に基づいた先進的指導方法の実践と、評価方法の開発・実施を通して、成果を科学的に検証する。さらに、データに基づく好事例を公表することにより、次期学習指導要領の改訂に向けた英語教育の抜本的改善に資することを目的とする。

信州大学における事業の目的・概要は以下の通りである。

先進的な指導と評価方法を研究開発し、その教育成果を多面的に分析し、データに基づく好事例を公表することにより、次期学習指導要領の改訂に向けた英語教育の抜本的改善に資することを目的とする。そのために、次期学習指導要領の領域別の目標及び CEFR 等を共通参照枠として、言語活動の高度化を図った「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を作成する。その目標に基づいて、指導方法・評価方法を開発・実施し、成果を科学的に検証する。

1.2 本事業の取組の全体像

拠点校に共通する取組は、『英語を使って何ができるようになるか』という観点から『CAN-DO リスト』形式で技能ごとに設定した学習到達目標を活用した指導と評価の改善である。現行の学習指導要領の目標、次期学習指導要領の検討の中で提案されている目標案、国の指標形式の目標案(中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ第 3 回資料、平成 27 年 12 月 11 日配布資料)、そして CEFR 等を参照して、各拠点校が言語活動の高度化を図り、言語使用の目的・場面を具体的に考えながら、学習到達目標を作成する。この目標に基づいて指導と評価の改善にあたる。言語活動の高度化にあたっては、4 技能の統合的活用に焦点をあてた高度化、ALT の活用による高度化、他教科との連携による高度化、ICT 教材の活用による高度化など、拠点校の実態に合わせて、拠点校の間で異なるアプローチをとる。本事業の主な取組をまとめると次のようになる。

- ・次期学習指導要領における目標や CEFR 等を共通参照枠として、「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を設定・改善すること。
- ・学習到達目標に従って、拠点校ごとの言語活動の高度化のアプローチにより、指導を改善すること。
- ・学習到達目標に基づいて、評価方法を改善すること。

1.3 本事業の取組の特徴

本事業は、英語教育の抜本的改善のための指導方法の研究・開発に関する取組と、その指導成果の評価・検証に関する取組に分かれる。

英語教育の抜本的改善のための指導方法の研究・開発に関する取組については、2つの特徴がある。第1に、次の取組の段階を設定し、2年間をひとまとまりとして、指導方法の研究・開発を行うことである。3年目以降は、(4)～(6)を繰り返し、5年間の事業期間の中で、授業改善・検証を継続的に実施していく。

【1年目】

- (1) 「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標設定
- (2) 評価方法の研究と実施
- (3) 授業改善及び先進的指導方法の研究

【2年目】

- (4) 先進的指導方法の実践
- (5) 先進的実践の検証
- (6) 授業改善

第2に、重点研究テーマを設定し、4技能の指導方法の研究・開発を順次的かつ累積的に行うことである。重点研究テーマは、当初の計画では、拠点校共通テーマとする。

【1年目】話すこと

【2年目】書くこと

【3年目】読むこと

【4年目】聞くこと

下の図は、これら2点の特徴をまとめたものである。

重点研究テーマ	話すことに関する研究 (平成28年度開始)	書くことに関する研究 (平成29年度開始)	読むことに関する研究 (平成30年度開始)	聞くことに関する研究 (平成31年度開始)
平成28年度	評価方法の研究・授業改善			
平成29年度	先進的実践と検証(1年目)	評価方法の研究・授業改善		
平成30年度	先進的実践と検証(2年目)	先進的実践と検証(1年目)	評価方法の研究・授業改善	
平成31年度	先進的実践と検証(3年目)	先進的実践と検証(2年目)	先進的実践と検証(1年目)	評価方法の研究・授業改善
平成32年度	先進的実践と検証(4年目)	先進的実践と検証(3年目)	先進的実践と検証(2年目)	先進的実践と検証(1年目)

なお、平成30年度以降の重点研究テーマとして、読むこと及び聞くことを据えずに、話すことと書くことという発信技能に焦点をあてて、読んだり聞いたりしたことについて、話したり書いたりするという技能統合を取り入れることになった。

2. 平成 30 年度事業報告(概要)と成果報告(概要)

2.1 平成 30 年度事業概要・計画

平成 30 年度の事業概要と計画は以下の通りであった。申請書より抜粋する。

(平成 30 年度事業)

・取組概要

平成 30 年度の拠点校共通の重点研究テーマは以下の通りである。

- ・「書くことに関する先進的実践と検証(1 年目)」
- ・「話すことに関する先進的実践と検証(2 年目)」
- ・「読むことに関する評価方法の研究・授業改善」

具体的には以下のことを取り組む。

- ① 平成 29 年度に検討した、書くことに関する先進的実践の実施(1 年目)(指導方法開発実践チーム)
平成 29 年度で実施した「書くことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成」に基づいて、平成 30 年度は実践に取り組む。
- ② 書くことに関するパフォーマンス評価の実施及び分析(1 年目)(評価方法開発検証チーム)
平成 29 年度に検討・実施した、書くことのパフォーマンス評価方法を、平成 30 年度も実施する。平成 29 年度と平成 30 年度の結果に基づきながら、①で取り組む先進的実践を検証する。
- ③ 初年度に検討した、話すことに関する先進的実践の実施(2 年目)(指導方法開発実践チーム)
平成 29 年度で実施した「話すことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成」に基づいて、平成 29 年度に引き続き、平成 30 年度も実践に取り組む。
- ④ 話すことに関するパフォーマンス評価の実施及び分析(2 年目)(評価方法開発検証チーム)
初年度に検討した、話すことのパフォーマンス評価方法を、平成 29 年度に引き続き、平成 30 年度も実施する。平成 28 年度、29 年度、30 年度の結果に基づきながら、③で取り組む先進的実践を検証する。
- ⑤ 多面的な成果評価方法の実施及び分析(評価方法開発検証チーム)
初年度に検討・実施した、言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等を評価する方法を、平成 29 年度に引き続き、平成 30 年度も実施する。平成 28 年度、平成 29 年度、平成 30 年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証する。
- ⑥ 外部資格・検定試験の実施(評価方法開発検証チーム)
中学 3 年生全員と高等学校 2 年生全員に対して、GTEC for Students (4 技能型)を実施する。平成 28 年度、平成 29 年度、平成 30 年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証する。
- ⑦ 読むことに関する評価の研究(評価方法開発検証チーム)
「CAN-DO リスト」形式で技能ごとに設定した学習到達目標に基づいて、読むことに関する評価のタスクを開発、実施、検討を行う。また、評価に関する研修を実施し、教員や ALT の評価タスク作成力の向上を行う。評価に関する研修は、ビデオ撮影を行い、e-Learning の教材化を行う。
- ⑦ 読むことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成(指導方法開発実践チーム)
読むことに焦点を置いた授業の記録・分析や、先進的な指導方法(言語活動の高度化、タブレット

ト端末の活用、ティーム・ティーチングの工夫など)に関する研修を通して、読むことの指導方法を研究する。平成 31 年度のために、年間指導計画、単元計画、授業計画を見直す。なお、先進的な指導方法に関する研修は、ビデオ撮影を行い、e-Learning の教材化を行う。

⑨ 平成 30 年度は、中間評価の場として、中間報告会を開催する。

・期待される事業成果

平成 30 年度の事業成果は、主として次の 6 点である。

- ① 書くことと話すことに関する先進的指導方法の実践の授業記録(好事例としてビデオ記録)
- ② 書くことと話すことに関する先進的指導方法の実践の評価
 - ・書くことと話すことに関する英語力の評価(全生徒対象)
 - ・言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等に関する調査結果に基づく評価(全生徒対象)
 - ・外部資格・検定試験の結果に基づく評価(中学 3 年生及び高等学校 2 年生対象)
- ③ 読むことの評価に関する研修会の記録ビデオに基づく e-Learning 教材
- ④ 読むことに関する英語力(拠点校全生徒対象)
- ⑤ 読むことに関する平成 31 年度以降に実施する年間指導計画及び単元計画(先進的指導方法を取り入れた計画)
- ⑥ ①～⑤をまとめた事業報告書の作成(プロジェクトのウェブサイトで公表する)

・平成 29 年度事業との継続性(成果の活用含む)

話すことに関する取組は、平成 28 年度の成果に基づいて継続的に行う。平成 29 年度事業との継続性は、次の 4 点である。

- ① 平成 29 年度に作成した、書くことに関する先進的実践の研究と指導計画に基づいて、先進的実践を継続的に行うこと。
- ② 平成 29 年度に開発・実施した、書くことのパフォーマンス評価を実施し、比較・分析すること。
- ③ 平成 28 年度から実施している、言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等を評価する方法を再度実施し、比較・分析すること。
- ④ 平成 28 年度から実施している外部資格・検定試験を再度実施し、比較・分析すること。

2.2 平成 30 年度事業概要・計画の進捗状況

この事業概要・計画に記載されている項目ごとに、平成 30 年度事業の進捗状況についてまとめる。

(1) 取組

平成 30 年度の拠点校共通の重点研究テーマは「話すことに関する先進的実践と検証(2 年目)」と「書くことに関する先進的実践と検証(1 年目)」であった。

具体的には以下のことに取り組んだ。

- ① 平成 29 年度に検討した、書くことに関する先進的実践の実施(1 年目)(指導方法開発実践チーム)
平成 29 年度で実施した「書くことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成」に基づいて、平成 30 年度は実践に取り組む。
- ② 初年度に検討した、話すことに関する先進的実践の実施(2 年目)(指導方法開発実践チーム)
平成 29 年度で実施した「話すことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成」に基づいて、平成 29 年度に引き続き、平成 30 年度も実践に取り組む。

平成 30 年度の取組

・平成 30 年度には、すべての拠点校(中学校 4 校、高等学校 3 校)で 5 領域の学習到達目標を設定し終えた。次に示すのは、軽井沢高等学校の学習到達目標である。

長野県軽井沢高等学校 CAN-DO LIST(2018)							
学年	CEFR J	GTEC	Speaking(話すこと)		Writing(書くこと)	Listening(聞くこと)	Reading(読むこと)
			やりとり	発表			
3	A1.3 ~ A2.1	Grade 3	身近な出来事や住んでいる地域のことについて、英語で簡単なやりとりができる。	地域のことや日本文化について英語で1~2分程度の発表をすることができる。	地域のことや日本文化について5~10文程度の英語でわかりやすく書くことができる。	比較的ゆっくり話してもらえば、内容の要点を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、外国語学習者向けに書かれた記事や物語の概要を理解することができる。
2	A1.2	Grade 2	友達など身近な人や学校生活について、既習の表現を使って簡単なやりとりができる。	身近な人や話題について英語で1分程度の発表をすることができる。	身近な出来事について、説明や感想を3~5文の英語を使って書くことができる。	ゆっくりはっきり話してもらえば、日常生活に必要な情報を聞いて理解し、反応することができる。	辞書を使えば、簡単な語を用いて書かれた場所についての説明文や案内文を理解できる。
1	A1.1	Grade 1	自分のことや興味関心のあることについて、簡単な英語表現を使って話すことができる。	自分のことについて名前や年齢、誕生日や趣味について英語で30秒以上発表することができる。	自分のこと(紹介、趣味、将来の夢など)を3~5文の英語を使って書くことができる。	5W1Hを使った疑問文を聞いて意味を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、身近な内容について書かれたメッセージや文章を理解できる。
3年間の学習到達目標			自分自身のことや身近な話題、軽井沢・日本のことについて、習った英語表現を用いながら発信することができる。	身近な話題に関して、自分の意見や感想を、文章構成を意識して書くことができる。	日常生活や興味のあることについて話された内容の要点を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、身近な内容について書かれたまとまりのある英文を読み、理解することができる。	

軽井沢高等学校の学習到達目標(平成 30 年度)

- ・軽井沢中学校と附属長野中学校では、5 領域の学習到達目標の改善を行った。
- ・①の書くことに関する各学校の実践の取り組みは以下の通り(第 2 回運営委員会報告に基づく)である。

【軽井沢中学校】

- ・「書くこと」については、生徒のグループワークを通し、画用紙にスキットを作成し、掲示をすることで周りからも評価してもらうような場を設けた。生徒たちは意欲的に取り組んでいたと思う。
- ・3 年生の教科書にあった「津波のバイオリン」の製作者が来校し話をしてくださった。その事について「書くこと」や「話すこと」を行ったが、生徒の「書くこと」「話すこと」に対するモチベーションが大変あがった行事であったと感じた。

【附属長野中学校】

- ・本年度は「書くこと」を中心に行った。授業では、自主学習として“2 分前学習”を行い、「話したことを書く」「前回授業で行ったことを書く」というライティングの活動に取り組んだ。この時、自分たちで気づきができるように、教員は気づいたことの暗号だけ示し、生徒が自分たちで直していくということも行った。
- ・昨年度は「書くこと」を論理的に行うために、“first, second, third..”とモデルを示していたが、提示モデルが少ないということで、今年は、手紙を書く時には、説明する時には、などという風に様々なモデルを提示することで、その中から、生徒が自分たちで目的・場面・状況などにあったモデルを選択できるようにした。
- ・“話したらかならず書く”ということを行った。説明したり、話したりしたら、必ず書くことで間違いを視覚化したり、次の授業の時に具体的なミスピックアップして、生徒たち自身も理解していくという取り組みを行った。
- ・家庭学習については、ICT の家庭学習への活用だけでなく、「英語を読んで考え・感想を書く」というような取り組みを行った。例えば、Douglas Jarrell 先生の出している「ジャレマガ」というメールマガジンを登録してもらい、それについて考え・感想を書いてきてもらい、その英語で書いた考えや感想をみんなでも共有するようにした。
- ・書く時に、書く相手を明確にするというポイントにも気をつけるようにした。例えば、ALT の先生にあてた手紙、3 年生から 2 年生に修学の旅行のおすすめスポットについてのアドバイスの手紙、2 年生から 3 年生へのお礼の手紙など、書く相手を明確にした。

【附属松本中学校】

・「書くこと」については、ALT の先生に向けて、また ALT の先生を通じて外国人留学生に向けて書くといった取り組みを行った。ALT の先生が困っていることなどの要望に応える形をとり、先生方の気持ちに沿うことを目標とした。その中で、生徒たちがどのように表現したらよいか、どの表現を使えばよいかというようなことを自分たちで求めるようになるなど、学習態度に変化があったと感じている。

【木島平中学校】

・CAN-DO リストに沿って、自分の意見や考えを「書くこと」を授業で出来るだけ多く取り入れるという実践ができたことがよかった。特に3年生は、授業中のライティングだけでなく、家庭学習でのライティングの時間もかなり積むことができた実感した。GTEC についても、本年度の3年生は昨年度の3年生よりも全体としての結果はよくなかったが、ライティングについては今年の結果の方が良かった。これは一つ今年の成果と感じている。

・パフォーマンステストと定期テストのライティングに、CAN-DO リストに沿った内容を盛り込んで実施した。授業とテストをリンクさせることが重要だと思い実施したが、まだ課題はあると感じている。

・総合的な学習の時間で、教科横断という形で、2・3年生が「英語で木島平を発信しよう」という講座を設けた。子どもたちには、木島平村には外国人観光客が少ないという実感がある。外国人の多い近隣の野沢温泉や飯山駅周辺からの外国人の呼び込みが出来ないかということで、調査活動を行い、最終的に英語のパンフレットやコルクボードの作成をし、木島平の良さを英語で発信するという活動を行った。自分で願いを持って、こういう英語だったら相手に通じるのではないかとか、英語力の如何は関係なく、わくわくしながら取り組んでいた。相手意識や場面設定等、どう伝えたらいいのかを考えさせながら指導することが大切だと感じた。

・課題としては、スピーキング・ライティングは、やってきたことの継続をどのように行っていくかということ。

【軽井沢高等学校】

・英作文の出題方式を変えた。「読んだことについて自分の意見を書く」などとし、読んだものと書いた内容を合わせたものについて評価を行うようにした。このことによって、GTEC のライティングの結果が向上し、成果がでているのかなと感じている。

【蘇南高等学校】

・(書くことに関して、言及無し)

【白馬高等学校】

・「書くこと」については、ジャーナルを書く、国語の授業で書いた卒業論文を英語表現の授業で英語にしてみるといった取り組みを行っているが、和文英訳の翻訳という域を出ず、即興的な取組は十分行っていない。即興的な「書くこと」については、何を書いたらいいのかわからない生徒も多く、書き始める前の指導も必要だと思われるし、技能統合ということも考えていく必要があると思われる。

・③の話すことに関する各学校の実践の取り組みは以下の通り(第2回運営委員会報告に基づく)である。

【軽井沢中学校】

・CAN-DO リストに関しては、ユニットゴールを設けて教員間で共有し、すすめてきた。

・「話すこと」については、文化祭でスピーチを行った。カナダのウイスラーの生徒との交流会があり、ステージで発表をしてカナダからの生徒や先生方に感想や評価をもらう機会があった。非常にいい発表ができて、先生方からも高い評価を得た。

・パフォーマンス評価として、スピーチやディスカッションを行った。また、パフォーマンス評価を定期テストに組み込む試みをした。生徒は書くことには苦手意識があるが、本年度の GTEC でのライティングが向上したので、ぜひ継続していきたい。

・課題としては、試行錯誤する中で、学習進度が遅れがちになってしまったことが反省点である。

・パフォーマンス評価を学期ごと実施したいと考えている。

・来年度から、生徒一人一人にタブレットの配布が出来るようになったので、ICT の活用を進めたいと

考えている。

【附属長野中学校】

・CAN-DO リストの見直しを毎年行っている。実際に実施してみて、生徒のレベルに合わせて見直しを行ったり、テストを行いその結果から高すぎたと思われる設定部分については1段階レベルを低くしたり、全体の見直しを行っている。それに伴い、教員間でレッスンゴール・レッスンプランを作成し、新しくきた教員ともレッスンゴールを共有し、それに基づいて授業展開をしていくということを行っている。この時、方法もすべて統一しているわけではなく、やり方は違って目指すものは共有しているという考え方で取り組んでいる。

・“話したらかならず書く”ということを行った。説明したり、話したりしたら、必ず書くことで間違いを視覚化したり、次の授業の時に具体的なミスをピックアップして、生徒たち自身も理解していくという取り組みを行った。

・「書くために話す」「書くために読む」といった技能統合を意識して行った。

【附属松本中学校】

・CAN-DO リストは、小学校(附属松本小学校)→中学校(附属松本中学校)への連携をどうやって行うか考えながら、学校の実情にあった形で見直しをやっているところ。定型はあるが、小学校・中学校のする合わせをしている。

・授業づくりについては、ALT と授業づくりのポイントを共有したり、ALT の先生から suggestion を得たりしてすすめている。

・パフォーマンステストについては、現状としてまだ取り組めていない。

【木島平中学校】

・スピーキングは、「1 分間トーク」などスモールトークを継続して出来た。

・課題としては、CAN-DO リストの見直しが必要である。パフォーマンステスト・定期テストにも込めてくると考えると改善の余地がある。例えば、ルクセンブルクとの交流を行っているが、交流団が来る・来ないによっても年度によって内容を考える必要があると思う。

・GTEC などの結果データなど、パフォーマンス評価に応じた授業の見直しを教員が意識して行っていく必要であるということ。

・協同的な学びにおける言語活動の工夫について実践を積んでいくこと。

【軽井沢高等学校】

・CAN-DO リストを見直して、より具体的な内容に修正した。例えば、「1 分間は話せるようになる」「5～6 文話せるようになる」など、具体的な数値や量など目標の設定をした。CAN-DO リストを共有して3 年目だが、同じ目標を設定し共有することで、同じところに向かっていくという意識が教員の中に生まれてきたように感じる。CAN-DO リストのあることにより、教員が変わっても継続していける体制作りが行えているように感じる。取り組んでよかった。

・毎週月曜日に、「1 分間スモールトーク」という活動で、先週末何をしたかを話させるという取り組みを行った。継続していくと、生徒たちは何を話そうかと準備をするし、それが日記にもつながり、経験したことを話せて書けるというように、徐々にようになってきたように感じている。

【蘇南高等学校】

・CAN-DO リストは、昨年度から改善をし、教科会でも共有している。CAN-DO リストの活用については、まだ十分に授業に反映できていないという指摘を、授業観察の際に亀谷先生からも受けたので、今後さらに、生徒とも共有が出来るようにしていきたいと思う。

・CAN-DO リストの共有をすすめるために、学校のホームページに載せて発信していこうという試みも考えている。

・パフォーマンステストは、授業科目によって実施の有無がわかる。コミュニケーション英語では行っているが、それ以外の科目では取り入れが進んでいない。コミュニケーション英語以外の授業でも、パフォーマンス評価を取り入れ、しっかりと評価していきたいと考えている。

・「話すこと」の指導については、コミュニケーション英語の授業では、トピックを与えてトークをすると

いう1分間トークを行っている。課題としては、生徒同士で会話していると、話している方は、ぶつ切りの文の羅列になってしまう点や、聞いている方も相槌が打てない、リアクションがわからない点などがある。これらについては、相槌をうつ練習をしたり、モデルをしめしたりして課題に対応し改善をすすめている。

・授業の一環としてフィールドワークを行うことに取り組んでいる。木曾路への外国人観光客向けのガイドをしたり、アンケートを取ったり、掲示を作成したりなどの活動を通して、少しでも実践的な英語を使う、またはそういった経験をするという学習を行っている。

【白馬高等学校】

・CAN-DO リストは、教員間での共有は行っているが見直しの必要性を感じている。内容としては、「身近なところで」という文言を多く使うようにしている。

・「話すこと」については、観光の授業にリンクさせたフィールドワークを多く行っている。インフォメーションセンターでのインタビューを行うなど、自分たちの地域の特性を生かした「話すこと」の活動に結びついているのが大きな進歩だと考えている。

・イングリッシュデイを、本年度は年6回、ALT や外部講師などを入れて実施した。このことで、普通科・国際観光科を問わず、生徒全体的に話すことへの態度が前向きになってきていることを実感している。

・パフォーマンス評価は、授業中にスピーチ・プレゼンテーション・ディスカッションを取り入れており、そこでの評価を成績に反映できている。

③ 書くことに関するパフォーマンス評価の実施及び分析(1年目)(評価方法開発検証チーム)

平成 29 年度に検討・実施した、書くことのパフォーマンス評価方法を、平成 30 年度も実施する。

平成 29 年度と平成 30 年度の結果に基づきながら、①で取り組む先進的実践を検証する。

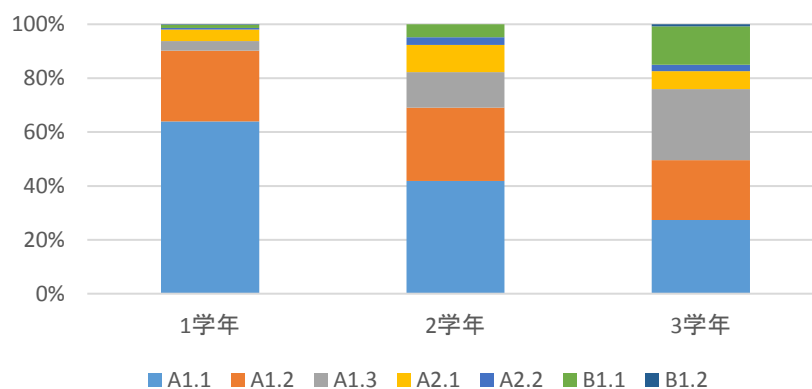
平成 30 年度の取組

・平成 29 年度に検討・実施した、書くことのパフォーマンス評価方法を、平成 30 年度も実施した。平成 29 年度と平成 30 年度の結果に基づきながら、①で取り組む先進的実践を検証する。現在まで、平成 30 年度に得られた結果の分析が終わっている。平成 31 年度に得られたパフォーマンステストは、回答を整理して、評価を行っているところである。

・次の表と図は、中学校(4校全体)に関して、平成 29 年度の書くことのパフォーマンス評価の結果を示したものである。学年が上がるにつれて、A1.1(青色)の割合が少なくなり、A1.3(灰色)及びB1.1(緑色)の割合が増えていることが分かった。この年度はまだ書くことの指導を集中的に行っていない生徒である。これらの結果をベースラインとして、平成 30 年度書くことのパフォーマンスがどの程度向上したかを平成 31 年度に分析を行う予定である。

	A1.1	A1.2	A1.3	A2.1	A2.2	B1.1	B1.2
1 学年	318	130	18	21	3	6	1
2 学年	208	135	66	50	14	24	0
3 学年	137	111	132	33	12	71	4

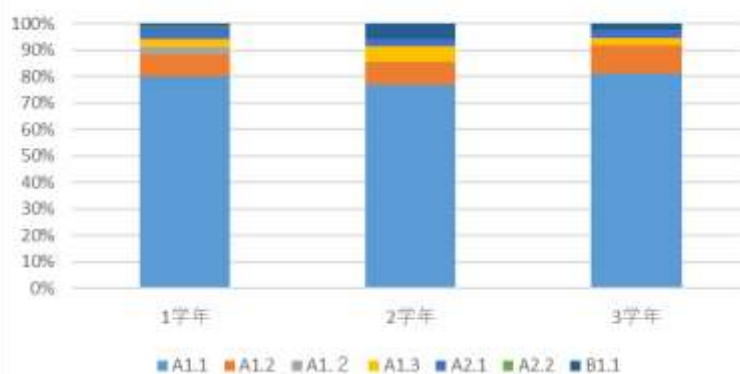
中学_書くことの独自テスト



・次の表と図は、高等学校(3校全体)に関して、平成29年度の書くことのパフォーマンス評価の結果を示したものである。高校の場合には、学年が上がるにつれてもそれほどの変化はなく、A1.1(青色)の割合が80%前後を示していた。この年度はまだ書くことの指導を集中的に行っていない生徒である。これらの結果をベースラインとして、平成30年度書くことのパフォーマンスがどの程度向上したかを平成31年度に分析を行う予定である。

	A1.1	A1.2	A1.2	A1.3	A2.1	A2.2	B1.1
1 学年	170	17	6	7	9	1	2
2 学年	144	16	0	11	5	0	11
3 学年	110	14	0	4	4	0	3

高等学校_書くことの独自テスト



- ④ 話すことに関するパフォーマンス評価の実施及び分析(2年目)(評価方法開発検証チーム)
初年度に検討した、話すことのパフォーマンス評価方法を、平成29年度に引き続き、平成30年度も実施する。平成28年度、29年度、30年度の結果に基づきながら、③で取り組む先進的実践を検証する。

平成30年度の取組

・初年度に検討した、話すことのパフォーマンス評価方法を、平成29年度に引き続き、平成30年度も実施した。平成28年度、29年度、30年度の結果に基づきながら、③で取り組む先進的実践を検証する。
・現在、平成28年度と29年度の結果分析が終わっている。平成30年度のパフォーマンステストの結果は、音声データを整理しているところである。評価は、平成31年度において引き続き実施する。

- ⑤ 多面的な成果評価方法の実施及び分析(評価方法開発検証チーム)
初年度に検討・実施した、言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等を評価する方法を、平成29年度に引き続き、平成30年度も実施する。平成28年度、平成29年度、平成30年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証する。

平成30年度の取組

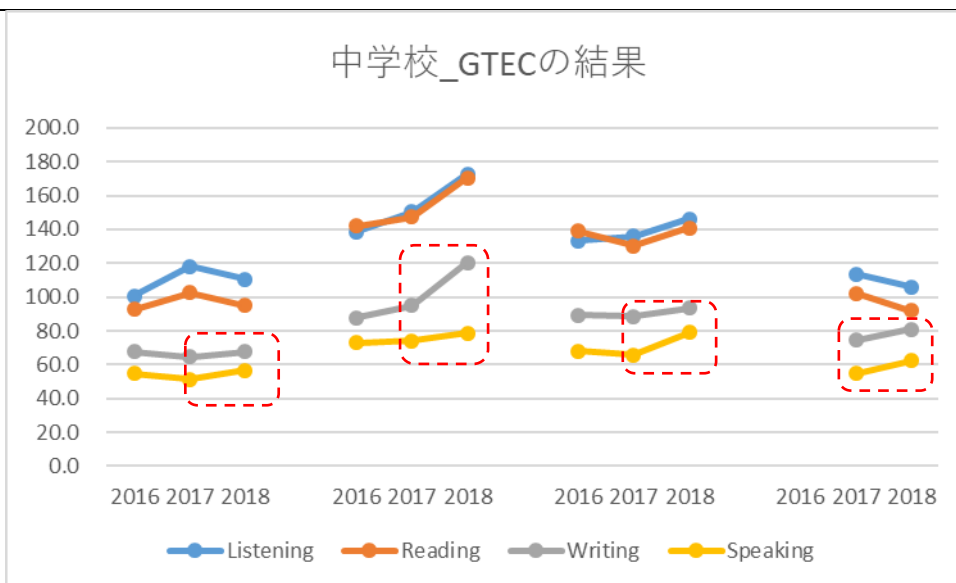
・初年度に検討・実施した、言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等を評価する方法を、平成29年度に引き続き、平成30年度も実施した。平成28年度、平成29年度、平成30年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証した。
・現在、データの入力を終了しているところである。分析については、引き続き、平成31年度に実施する。

- ⑥ 外部資格・検定試験の実施(評価方法開発検証チーム)
中学3年生全員と高等学校2年生全員に対して、GTEC for Students(4技能型)を実施する。平成28年度、平成29年度、平成30年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証する。

平成30年度の取組

・中学3年生全員と高等学校2年生全員に対して、GTEC for Students(4技能型)を実施した。平成28年度、平成29年度、平成30年度の結果に基づきながら、①及び③で取り組む先進的実践を検証する。
・主な結果は次の通りである。次の表と図は、中学校に関する、平成28年度、平成29年度、平成30年度のGTEC for Students(4技能型)の得点の結果である。どの中学校においても、話すことと書くことに関して、平成30年度の3年生は、平成29年度の3年生よりも得点が高かった。

	A 中学校			B 中学校			C 中学校			D 中学校	
	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2017	2018
Listening	100.6	118.3	110.5	138.7	150.4	172.7	133.3	136.0	146.3	113.6	105.8
Reading	92.6	102.6	95.1	142.0	147.2	170.3	139.0	130.1	140.8	102.1	91.8
Writing	67.5	64.5	67.6	87.9	95.0	120.5	89.4	88.5	93.6	74.6	80.8
Speaking	54.6	51.5	56.5	72.9	73.9	78.7	67.9	65.9	78.9	54.8	62.5



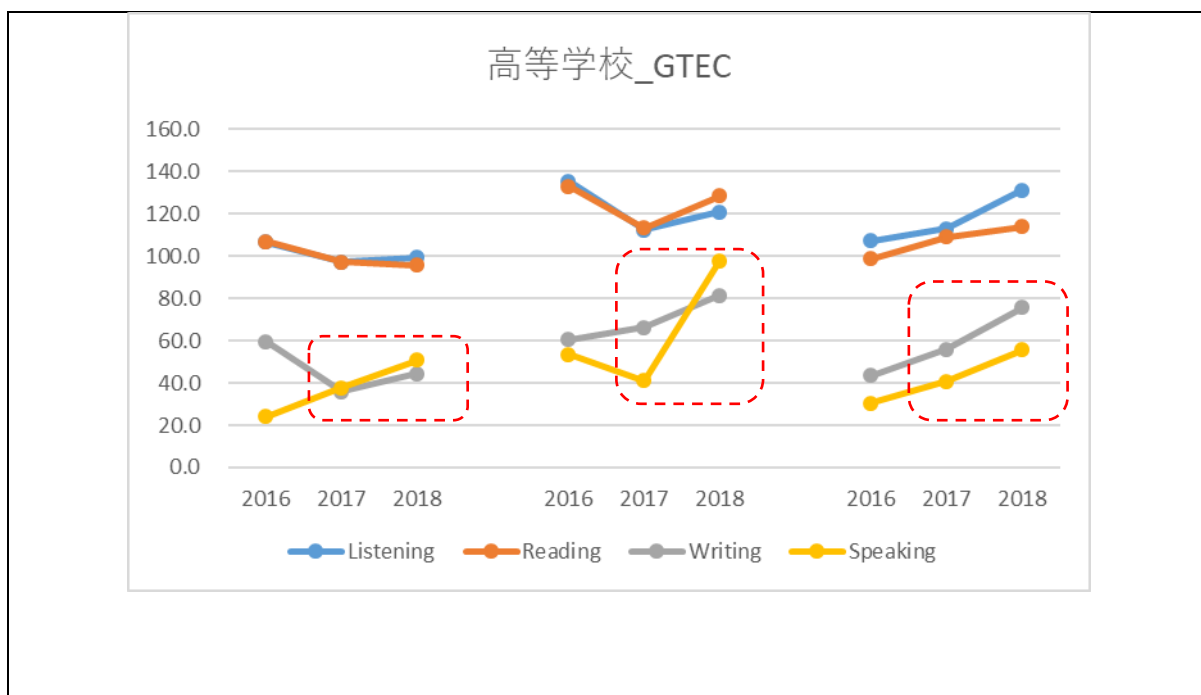
・このことに加えて、学年当初に GTEC for Students を実施することにより、当該学年の経時的な分析を可能となるようにした(B 中学校 2 クラスで実施した)。

・主な結果は以下の通りである。2 クラスと時間の交互作用は、統計的に有意でなかった。聞くこと、読むこと、書くことは、統計的に有意に伸びたが、話すことの得点は変化がなかった。平成 30 年度は、「話すこと」と「書くこと」に焦点をあてて指導したが、書くことの力については効果が見られたが、話すことの力については効果が見られなかった。

	Listening		Reading		Writing		Speaking	
	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月
3 年 B 組	157.2	176.1	154.2	181.2	114.4	116.9	80.4	80.2
3 年 C 組	165.1	175.3	152.3	172.5	115.9	124.1	79.4	79.3
合計	161.4	175.7	153.2	176.5	115.2	120.7	79.9	79.7

・次の表と図は、高等学校に関する、平成 28 年度、平成 29 年度、平成 30 年度の GTEC for Students(4 技能型)の得点の結果である。どの高等学校においても、話すことと書くことに関して、平成 30 年度の 2 年生は、平成 29 年度の 2 年生よりも得点が高かった。特に、B 高等学校では、話すこと得点が、50 点以上向上した。

	A 高等学校			B 高等学校			C 高等学校		
	2016	2017	2018	2016	2017	2018	2016	2017	2018
Listening	106.5	97.1	99.3	135.6	112.3	121.0	107.3	113.1	131.3
Reading	107.0	97.3	95.8	133.0	113.4	128.5	98.9	109.1	113.8
Writing	59.4	35.9	44.3	60.5	66.2	81.4	43.6	56.1	75.8
Speaking	24.2	37.8	50.7	53.6	41.1	97.7	30.5	40.8	55.5



⑦ 読むことに関する評価の研究(評価方法開発検証チーム)

「CAN-DO リスト」形式で技能ごとに設定した学習到達目標に基づいて、読むことに関する評価のタスクを開発、実施、検討を行う。また、評価に関する研修を実施し、教員や ALT の評価タスク作成力の向上を行う。評価に関する研修は、ビデオ撮影を行い、e-Learning の教材化を行う。

平成 30 年度の取組

・平成 30 年度における検討の結果、英語の発信能力と即興的な言語使用能力に焦点をあてて、研究をすることになったため、読むことに関する評価の研究は実施しなかった。

⑦ 読むことに関する先進的実践の研究と指導計画の作成(指導方法開発実践チーム)

読むことに焦点を置いた授業の記録・分析や、先進的な指導方法(言語活動の高度化、タブレット端末の活用、チーム・ティーチングの工夫など)に関する研修を通して、読むことの指導方法を研究する。平成 31 年度のために、年間指導計画、単元計画、授業計画を見直す。なお、先進的な指導方法に関する研修は、ビデオ撮影を行い、e-Learning の教材化を行う。

平成 30 年度の取組

・平成 30 年度における検討の結果、英語の発信能力と即興的な言語使用能力に焦点をあてて、研究をすることになったため、読むことに関する指導計画の研究は実施しなかった。

- ⑨ 平成 30 年度は、中間評価の場として、中間報告会を開催する。

平成 30 年度の取組

・平成 30 年度においては、2 回の研修会を実施し、その中で本事業の取り組みを報告する機会を設けた。

・第 1 回研修会が以下の通り開催され、計 52 名の出席があった。

- 1 趣旨 重点研究テーマ「指導と評価について」
- 2 主催 信州大学教育学部 信州英語プロジェクト
- 3 参加対象 中学校・高等学校の英語教員及び ALT
- 4 日時 平成 30 年 7 月 16 日(月、祝日)13:00～16:40
- 5 会場 信州大学教育学部 N 棟 N101
- 6 日程
 - 12:30～12:55 受付
 - 13:00～13:05 挨拶
 - 13:05～14:05 ワークショップ 50 分 質疑応答 10 分 (English)
「ライティングのパフォーマンス評価 Using CEFR/CEFR-J to Evaluate Students' Writing Performance」株式会社 AtoZ 講師ミゲル ミシヨン、スクール事業部 宮坂 るみ
 - 14:05～14:10 休憩
 - 14:10～15:40 講演 90 分 (English)
「インプット型・アウトプット型の言語活動の紹介—第二言語習得研究に基づいて—
Input-based and output-based activities:A second language acquisition perspective」
宮城教育大学 鈴木渉准教授
 - 15:40～15:45 休憩
 - 15:45～16:35 プロジェクトの報告(日本語と英語)
附属長野中学校、軽井沢中学校、木島平中学校
 - 16:35～16:40 閉会の挨拶

・第 2 回研修会は以下の通り開催され、計 63 名の参加者があった。

- 1 趣旨 重点研究テーマ「ライティングとスピーキングの指導と評価について」
- 2 主催 信州大学教育学部 信州英語プロジェクト
- 3 参加対象 中学校・高等学校の英語教員及び ALT
- 4 日時 平成 31 年 2 月 17 日(日)13:00～16:40
- 5 会場 信州大学教育学部 N 棟 N101
(〒380-8544 長野市西長野 6-1)
- 6 日程
 - 12:30～12:55 受付
 - 13:00～13:05 挨拶
 - 13:05～14:05 プロジェクトの報告(英語と日本語)
附属松本中学校 荻原 大輔 教諭
軽井沢高等学校 中澤俊樹 教諭
蘇南高等学校 今井直哉 教諭
白馬高等学校 荒井宏 教諭
株式会社エー・トウ・ゼット 宮坂るみ 様 ミゲル・ミシヨン 先生
 - 14:05～14:15 休憩
 - 14:15～16:35 講演【休憩 10 分・質疑応答 10 分を含む】
「新学習指導要領を踏まえた今後の英語教育の在り方」
文部科学省 初等中等教育局教科調査官 下山田芳子 先生
 - 16:35～16:40 閉会の挨拶

(2) 事業成果

平成 20 年度の事業成果は、主として次の 3 点である。

- ① 書くことと話すことに関する先進的指導方法の実践の授業記録(好事例としてビデオ記録)
- ② 書くことと話すことに関する先進的指導方法の実践の評価
 - ・書くことと話すことに関する英語力の評価(全生徒対象)
 - ・言語についての知識・理解、コミュニケーションを図ろうとする態度等に関する調査結果に基づく評価(全生徒対象)
 - ・外部資格・検定試験の結果に基づく評価(中学 3 年生及び高等学校 2 年生対象)
- ③ ①と②まとめた事業報告書の作成(プロジェクトのウェブサイトで公表する予定である)

2.3 外部評価委員会による評価

平成 30 年 2 月 17 日に第 2 回運営委員会・外部評価委員会を開催した。平成 29 年度の事業の進捗状況の報告の後、3 名の外部評価委員より以下の評価をいただいた。全体的に事業の内容について肯定的なご意見をいただいた。課題も指摘していただいたので、平成 30 年度の事業実施に活かしていくことにした。

【竹内理外部評価委員】

- ・報告を聞くと、大きな進歩の報告もあり、すごくいい形で進んでいると実感している。
- ・GTEC の点数はすぐに伸びるものではないので、すぐに結果が出ないことは問題ではない。自己評価や情意面、態度面が伸びていることが、おそらく GTEC の点数の上がる前駆状態であると考えられるので、そこが上がって何かがあれば、proficiency も上がっていくと思われる。その何かは、モデルをたくさん見せることであったり、学習法を教えたり、時間数をたくさんかけていくことだったりと思うが、そういったものがあって初めて proficiency につながっていく。Proficiency にこだわるのではなく、前段階とどういうことを行っていかに着目する方が良いのではないかと思う
- ・毎回の CAN-DO ができれば achievement は達成したということなので、achievement であれば伸びているのではないかと思う。Proficiency テストであるものと achievement の毎回の CAN-DO の達成を分けていったほうが、先生方の気持ちの負担も少ないのではないかと思う。
- ・CAN-DO リストの見直しについての言及が多くあった。CAN-DO リストは、その性格上の絶対に見直ししていくことが必要である。CAN-DO リストは常に refine していくものなので、見直しはいいことだと思う。軽井沢高校では、プラスしてテストを変えるということをおっしゃっていたが、テストを変えるというのは一番いいかもしれない。テストを変えるということは、授業に相当な改善を求めていくことだと思うので、そのようなつなげ方もよいことだと思う。
- ・CAN-DO リストの見直しのサイクルを作っていくことが重要。どのように見直ししていくか考えることも、この事業における大きな成果となっていくと思う。
- ・あいづちを教えるという言及もあったが、大切なことだと思う。話しを続けていこうと思えば、あいづちをうつことは必要。聞いている際に、メモを取ったりうなずいたりすることは重要なポイントで、それを言葉にして表していくことは必要なことなので、そういった部分にまで取り組んでいるのは、頼もしいと感じる。
- ・文をぶつ切りでなく、文のつながりをつけていくというモデルの提示をすることも大切。
- ・普及のためのパンフレットの作成は、非常によいことだと思う。どうすればいいのかは、数値や論文で示すより、シンプルにポイントを示したパンフレットをみて、まず関心を持ってもらうことが大切だと思うので、そのような活動を続けていってほしい。

【内堀繁利外部評価委員】

- ・プロジェクトや先生方の報告を聞いて、着実に成果があがっていることを実感した。日々の現場の苦労が、成果として表れていることがよいことだと思う。
- ・高校では、大学受験にむけて同じ参考書を使うということがあっても、授業は、それぞれの展開をしていくことが多いと思う。その中で、個人から教科間の共有がされるようになったことがかなりの前進だと思う。

・スピーキングやライティングで何かを表現する時に、英語力以前に話す・書く内容がわからないといった発言があった。そういった問題を英語の授業だけで問題を解決することはなかなか難しい。教科間の横の連携を図ることも大切になってくると思う。例えば「探求的な活動」といった時間ひとつとっても、この時間だけではなかなか探求的なスキルやマインドは育っていかない。他の教科でもそれに合わせて、どこで何が出来るかを学校全体で考えていかなければいけない。同様に、論理的な思考力や順番を追って説明していく力、そもそも何を話すかということは、社会や国語と相互に連携を図りながら、(英語のためだけに行うのではなく)学校として付けたい力を、教科の連携をとおして培っていくという仕組みを作っていくことも必要ではないかと思った。

・子ども達の英語に対する意欲、関心、おもしろいと思うことといったモチベーションがあがっていくことが一番大事なこと。宿題をやってくれるといっても、嫌々やってくるのと、ある程前向きにやってくる、かなり前向きにやってくるのでは、その後の伸びが違う。まずは、子ども達のモチベーション、興味、おもしろい・やりたいと思う気持ちをあげる(どの教科でも同じだが)大切だと思う。

・授業中に4技能をバランスよく伸ばそうと思ってやっていると、パフォーマンス評価や単発の評価をしているにもかかわらず、それが成績に反映していないと子ども達のモチベーションはさがってしまう。日ごろの評価や定期テストの問題が、評定とリンクしていることは重要だと思う。

・ICTの活用の面でいうと、文科省や経産省だけでなく、長野県の教育委員会でも「個別最適化」ということが日常会話の中で毎日のように聞かれる時代になってきた。一斉授業、アクティブラーニング的なグループワーク・ペアワークに加えて、個別に自分の得意なところ苦手なところを伸ばし克服することが必要となってきたと感じる。人と関係の中で伸ばす部分と個人で伸ばす部分があると思われる。個人で伸ばす部分については、ICTの活用が考えられると思う。ICTの活用ですべて解決できるわけではないが、ICTの活用が子ども達の英語力や興味、関心をあげるのには間違いのないことなので、ICTをどのように活用していくかという視点をもつことが大切になっていくと思う。

・小学校へ英語が導入された。小中高はそれぞれ頑張ってやっていますが、子ども達目線で見ると「今までやってきたことと全然やり方が違う」「今までやったことなんて関係ない」といった戸惑いがあるケースが多いと思う。それまで子ども達がどういったことをやってきたか、どういった連携ができるかを一定程度考えていかないと本当の成果にはつながらない。

【竹前傳蔵外部評価委員】

・CAN-DOリストを使った授業改善、技能統合、パフォーマンステストといった具体的なこと1つ1つを取り入れることは大事だが、一番変わらなければならないのは先生方の授業感ではないかと、自身の反省も含めて思う。いろいろな事を取り入れていく中で、先生方の授業感の変化も普及用のパンフレットに現れるとよいと思う。

・小→中の連携はなかなか進まないと言われてきたが、互いの授業を見合うとか、中学校の専科の先生が小学校の外国語の授業をするなど、小中の連携は少しずつ進んできている。一方、中→高は、高校の校種がいろいろある中で、連携が難しい。本事業で、中高の連携をどのようにしていったらよいかということが見えてくるとよいと思う。軽井沢中・軽井沢高のように中高が近接している場合は比較的連携がとりやすいと思うが、特に中高が隣接していない広い学区の高等学校との連携を考えた場合に、何を頭において指導していけばいいのか。そういった場合に、中高とおしてのCAN-DOリストやパフォーマンス評価を用いてつながっていくことが出来ればよいと思う。この事業で、中学校教員が小中の連携と同時に中高の連携も意識できるように示せるとよいと思う。

3. 平成 30 年度の会議、授業観察、研究会等参加の記録

本章では、事業のうち、旅費の使用が発生した主たる会議、授業観察、研究会等参加の概要を報告する。

3.1 会議の記録

平成 30 年度には、第 1 回運営委員会を 7 月 16 日に、第 2 回運営委員会・外部評価委員会を 2 月 17 日に実施した。会議の概要は以下の通りである。

(1) 第 1 回運営委員会

日時： 平成 30 年 7 月 16 日(日)10:30～12:15

場所： 信州大学教育学部 第 1 会議室(M201)

出席者： 運営委員会委員

出席者： 運営委員会委員

酒井英樹(信州大学学術研究院教育学系 教授)

島田英昭(信州大学学術研究院教育学系 准教授)

和田順一(松本大学教育学部 准教授)

鈴木渉(宮城教育大学 准教授)

倉下 直(長野県教育委員会教学指導課 高等教育指導係 指導主事)

小岩井高德(長野県教育委員会教学指導課 義務教育指導係 指導主事)

高見澤益子(軽井沢町立軽井沢中学校 教諭)

三井由美子(木島平村立木島平中学校 教諭)

轟律夫(長野県軽井沢高等学校 教諭)

今井直哉(長野県蘇南高等学校 教諭)

佐藤大樹(信州大学教育学部附属長野中学校 教諭)

荻原大輔(信州大学教育学部附属松本中学校 教諭)

事業関係

遠藤美千子(株式会社エー・トウ・ゼット)

宮坂るみ(株式会社エー・トウ・ゼット)

大山 繁(信州大学教育学部 総務グループ会計係 主査)

小森真樹(信州英語プロジェクト事務局 研究員)

主な議題:

1. 平成 29 年度までの成果について
2. 平成 30 年度の事業計画について
 - ・評価方法開発検証チーム
 - ・指導方法開発実践チーム(授業観察について)
 - ・第 2 回運営委員会・外部評価委員会・研修会の日程について
3. その他、意見交換等
4. 諸連絡
 - ・本年度お願いしたいこと
 - ・GTEC の実施について
 - ・承諾書

(2) 第 2 回運営委員会・外部評価委員会

日時： 平成 31 年 2 月 17 日(日)10:30～12:15

場所： 信州大学教育学部 第 1 会議室(M201)

出席者：運営委員会委員

酒井英樹(信州大学学術研究院教育学系 教授)
島田英昭(信州大学学術研究院教育学系 准教授)
和田順一(松本大学教育学部 准教授)
亀谷みゆき(朝日大学 准教授)
倉下 直(長野県教育委員会教学指導課 高等教育指導係 指導主事)
小岩井高德(長野県教育委員会教学指導課 義務教育指導係 指導主事)
田中信夫(軽井沢町立軽井沢中学校 教諭)
三井由美子(木島平村立木島平中学校 教諭)
中澤俊樹(長野県軽井沢高等学校 教諭)
今井直哉(長野県蘇南高等学校 教諭)
中嶋涉(長野県白馬高等学校 教諭)
佐藤大樹(信州大学教育学部附属長野中学校 教諭)
翠川祐輔(信州大学教育学部附属松本中学校 教諭)

外部評価委員

竹前傳藏(信濃教育会)
内堀繁利(長野県教育委員会)
竹内 理(関西大学 教授)

事業関係

遠藤美千子(株式会社エー・トウ・ゼット)
宮坂るみ(株式会社エー・トウ・ゼット)
大山 繁(信州大学教育学部 総務グループ会計係 主査)
小森真樹(信州英語プロジェクト事務局 研究員)
相澤順子(信州英語プロジェクト事務局 事務補佐員)

研修会講師

下山田芳子(文部科学省初等中等教育局国際教育課
外国語教育推進室教科調査官)

主な議題:

1. 中間評価の報告
2. 授業観察について
3. データの分析
4. 4年目に向けた議論
5. 取り組みの状況
6. 2019年からのGTEC for Studentsについて(ベネッセコーポレーション中島氏)
7. 外部評価委員の評価
8. 各委員より

3.2 授業観察の記録

指導方法開発実践チームでは、授業改善のために、拠点校の先生による授業のビデオ記録を行うと同時に、平成30年度は、亀谷みゆき准教授(朝日大学)、和田順一准教授(松本大学)、倉下直指導主事(長野県教育委員会)、小岩井高德指導主事(長野県教育委員会)、酒井英樹教授(信州大学)が、拠点校を訪問し、授業観察及び教科会を実施した。その際、CAN-DO リスト形式の学習到達目標に照らし合わせて、検討会を実施した。

拠点校訪問の日程は、以下の通りであった。

2018年度 第1回授業観察

	木島平中学校	軽井沢中学	蘇南高校	附松本中	附長中	軽井沢高校	白馬高校
日時	8月29日(水)	10月12日(金)	10月25日(木)	11月8日(木)	11月27日(水)	11月28日(水)	11月29日(木)
	ビデオなし			ビデオなし			
①クラス		2限 9:45~10:35 2年4組	2限 10:20~11:10 グローバルスタ ディーズ(126教室)		1限 9:00~9:50 1年B組	5限 13:30~14:20 前半・英語3A講座 後半・英語3C講座	1限 8:55~9:45 英語表現2B 関係代名詞
①授業者		伊藤 恵理先生	今井 直哉先生	萩原 大輔先生	野口 育美先生	(前半)長嶋幸恵先生 (後半)中澤俊樹先生	中嶋 渉先生
②クラス		3限 10:45~11:35 1年1組	3限 11:20~12:20 コミュニケーション 英語Ⅲ(122教室)		2限 10:00~10:50 2年A組	6限 14:30~15:20 前半・英語2B講座 後半・英語2D講座	2限 9:55~10:45 総合英語Ⅲ3B pro-visionⅢ lesson2
②授業者		田中 信夫先生	塩原 賢三先生		桑原 摩帆先生	(前半)轟律夫先生 (後半)杉田先生	中村 健太郎先生
③クラス		4限 11:45~12:35 3年4組					
③授業者		岩村 仁基先生					
教科会		12:35~13:35 (給食時間)	12:20~13:10 (4限)		11:05~11:55 (3限)	15:20~15:50	10:50~11:45 (3限)
観察者	酒井先生	和田先生 小岩井先生	酒井先生 和田先生 倉下先生	酒井先生	和田先生	和田先生 倉下先生	和田先生 倉下先生

2018年度 第2回 授業観察

	木島平中学校	軽井沢中学校	附属長野中学校	附属松本中学校	蘇南高校
日時	11月6日(火)	12月6日(木)	12月10日(月)	12月17日(月)	1月9日(水)
			ビデオなし		
①クラス	2限 9:45~10:35 3年2組	2限 9:45~10:35 3年3組 基礎コース		5限 13:25~14:15 1年D組	2限 10:20~11:10 コミュニケーション英語Ⅰ
①授業者	有賀 康晃先生	岩村 仁基先生	桑原 摩帆先生	宮下 昌子先生	今井 直哉先生
②クラス	3限 10:45~11:35 3年1組	3限 10:45~11:35 1年4組		6限 14:25~15:15 3年B組	3限 11:20~12:10 コミュニケーション英語Ⅱ
②授業者	三井 由美子先生	高見澤 益子先生		翠川 祐輔先生	西澤 博樹先生
教科会	11:50~12:40 (4限)	11:45~12:35 (4限)		15:15以降	12:10~ (昼食時・4限)
観察者	酒井先生 和田先生 小岩井先生	和田先生	酒井先生	和田先生	和田先生 亀谷先生

亀谷准教授からは、第2回運営委員会(平成31年2月17日)において、以下の評価をいただいている。

2017年からの授業観察を行った中で、今年は英語科のチーム力が高まっており、学校全体で、評価の改善、授業の改善に取り組んでいこうとする意志が強く感じられた。昨年度に比べ、生徒も英語活動を行うことに慣れてきたように感じた。課題としては、CAN-DOリストからどのように年間指導計画におとし入れ、4技能5領域について單元ごとに「この單元が終わったら何が出来るようになっているか」といった目標を設定していくかということ。また、その目標を教員間、教員と生徒の間で共有することで、一つ一つの言語活動の意味が出てくると思われる。こういったポイントに重点をおくと、さらにより授業になっていくのではないかと期待を持って授業観察をした。

4. 「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標

拠点校において作成した5つの領域別の学習到達目標を作成及び改善した。例として、長野県軽井沢高等学校の学習到達目標を示す。各拠点校の目標は、整理をした上で平成31年度中にウェブにより公開することとした。

長野県軽井沢高等学校 CAN-DO LIST(2018)							
学年	CEFR J	GTEC	Speaking(話すこと)		Writing(書くこと)	Listening(聞くこと)	Reading(読むこと)
			やりとり	発表			
3	A1.3 ~ A2.1	Grade 3	身近な出来事や住んでいる地域のことについて、英語で簡単なやりとりができる。	地域のことや日本文化について英語で1~2分程度の発表をすることができる。	地域のことや日本文化について5~10文程度の英語でわかりやすく書くことができる。	比較的ゆっくり話してもらえば、内容の要点を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、外国語学習者向けに書かれた記事や物語の概要を理解することができる。
2	A1.2	Grade 2	友達など身近な人や学校生活について、既習の表現を使って簡単なやりとりができる。	身近な人や話題について英語で1分程度の発表をすることができる。	身近な出来事について、説明や感想を3~5文の英語を使って書くことができる。	ゆっくりはっきり話してもらえば、日常生活に必要な情報を聞いて理解し、反応することができる。	辞書を使えば、簡単な語を用いて書かれた場所についての説明文や案内文を理解できる。
1	A1.1	Grade 1	自分のことや興味関心のあることについて、簡単な英語表現を使って話すことができる。	自分のことについて名前や年齢、誕生日や趣味について英語で30秒以上発表することができる。	自分のこと(紹介、趣味、将来の夢など)を3~5文の英語を使って書くことができる。	5W1Hを使った疑問文を聞いて意味を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、身近な内容について書かれたメッセージや文章を理解できる。
3年間の学習到達目標			自分自身のことや身近な話題、軽井沢・日本のことについて、習った英語表現を用いながら発信することができる。	身近な話題に関して、自分の意見や感想を、文章構成を意識して書くことができる。	身近な話題に関して、自分の意見や感想を、文章構成を意識して書くことができる。	日常生活や興味のあることについて話された内容の要点を理解し、反応することができる。	辞書を使えば、身近なことについて書かれたまとまりのある英文を読み、理解することができる。

平成 30 年度事業の体制

事業実施機関

■代表法人(申請法人)等

法人名	国立大学法人信州大学
理事長名	濱田 州博
学校名	信州大学
所在地	松本市旭 3 丁目 1 番 1 号

■事業責任者(事業全体の統括責任者)

職名	教授
氏名	酒井 英樹
電話番号 (FAX 番号)	026-238-4191 (026-234-5540)
E-mail	sakaih@shinshu-u.ac.jp

■事務担当

職名	主査
氏名	大山 繁
電話番号 (FAX 番号)	026-238-4026 (026-234-5540)
E-mail	edu_shien@shinshu-u.ac.jp

構成員・構成機関等

(1) 構成機関(機関として本事業に参画する学校・企業・団体等)

	構成機関(学校・団体・機関等)の名称	役割等	都道府県名
1	信州大学	研究推進	長野県
2	長野県教育委員会	連携・協力	長野県
3	軽井沢町立軽井沢中学校	拠点校	長野県
4	長野県軽井沢高等学校	拠点校	長野県
5	長野県蘇南高等学校	拠点校	長野県
6	長野県白馬高等学校	拠点校	長野県
7	信州大学教育学部附属長野中学校	拠点校	長野県
8	信州大学教育学部附属松本中学校	拠点校	長野県
9	木島平村立木島平中学校	拠点校	長野県

(2) 構成員(委員)の氏名等(上記(1)の機関から参画する者及び個人で本事業に参画する者等)

氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
酒井 英樹	信州大学学術研究院教育学系・教授	プロジェクトリーダー	長野県
田中 江扶	信州大学学術研究院教育学系・准教授	指導方法開発実践 チームリーダー	長野県
金子 史彦	信州大学学術研究院教育学系・准教授	研修会運営チーム	長野県
島田 英昭	信州大学学術研究院教育学系・准教授	評価方法開発検証 チームリーダー	長野県

谷塚 光典	信州大学学術研究院教育学系・准教授	研修会運営 チームリーダー	長野県
倉下 直	長野県教育委員会教学指導課・高校教育指導係・指導主事	拠点校の総括	長野県
小岩井 高德	長野県教育委員会教学指導課・義務教育指導係・指導主事	拠点校の総括	長野県
高見澤 益子	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
岩村 仁基	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
佐藤 恵理	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
田中 信夫	軽井沢町立軽井沢中学校・講師	拠点校の研究推進	長野県
三井 由美子	木島平村立木島平中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
有賀 康晃	木島平村立木島平中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中澤 俊樹	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
小林 宏子	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
杉田 暁夫	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
轟 律夫	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
長嶋 幸恵	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
今井 直哉	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
西澤 博樹	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
松村 梨絵	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
塩原 賢三	長野県蘇南高等学校・講師	拠点校の研究推進	長野県
荒井 宏	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中嶋 渉	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中平 聖子	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中村 健太郎	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
長澤 未来	長野県白馬高等学校・講師	拠点校の研究推進	長野県
佐藤 大樹	信州大学教育学部 附属長野中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
米山 聡	信州大学教育学部 附属長野中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
桑原 摩帆	塩尻市立丘中学校・教諭 (信州大学教育学部 附属長野中学校研修派遣)	拠点校の研究推進	長野県
野口 育美	松本市立鎌田中学校・教諭 (信州大学教育学部 附属長野中学校研修派遣)	拠点校の研究推進	長野県
宮下 昌子	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
荻原 大輔	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
翠川 祐輔	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
齊藤 優	信州大学教育学部 附属松本中学校・講師	拠点校の研究推進	長野県
田中 真由美	武庫川女子大学・准教授(平成28年度まで信州大学助教)	指導改善、 授業記録データ分析	兵庫県

和田 順一	松本大学・准教授(中部地区英語教育学会運営委員)	指導改善、 授業記録データ分析	長野県
山森 直人	鳴門教育大学・教授 (全国英語教育学会事務局長)	指導改善、 授業記録データ分析	徳島県
亀谷 みゆき	朝日大学・准教授	指導改善、 授業記録データ分析	岐阜県

(3)運営委員会(構成員(委員)の氏名等(上記(2)の者のうち本委員会構成員))

氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
酒井 英樹	信州大学学術研究院教育学系・教授	プロジェクトリーダー	長野県
田中 江扶	信州大学学術研究院教育学系・准教授	指導方法開発実践 チームリーダー	長野県
島田 英昭	信州大学学術研究院教育学系・准教授	評価方法開発検証チームリ ーダー	長野県
倉下 直	長野県教育委員会教学指導課・高校教育指導係・指導主事	拠点校の総括	長野県
小岩井 高德	長野県教育委員会教学指導課・義務教育指導係・指導主事	拠点校の総括	長野県
高見澤 益子	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
三井 由美子	木島平村立木島平中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中澤 俊樹	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
今井 直哉	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
荒井 宏	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
佐藤 大樹	信州大学教育学部 附属長野中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
宮下 昌子	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県

(4)下部組織(設置は任意)(4)下部組織(設置は任意)

名称(指導方法開発実践チーム)			
氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
田中 江扶	信州大学学術研究院教育学系・准教授	指導方法開発実践 チームリーダー	長野県
和田 順一	松本大学・准教授(中部地区英語教育学会運委委員)	指導改善、 授業記録データ分析	長野県
山森 直人	鳴門教育大学・教授(全国英語教育学会事務局長)	指導改善、 授業記録データ分析	徳島県
田中 真由美	武庫川女子大学・准教授(平成28年度まで信州大学助教)	指導改善、 授業記録データ分析	兵庫県
亀谷 みゆき	朝日大学・准教授	指導改善、 授業記録データ分析	岐阜県
高見澤 益子	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
三井 由美子	木島平村立木島平中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中澤 俊樹	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
今井 直哉	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
荒井 宏	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県

佐藤 大樹	信州大学教育学部 附属長野中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
宮下 昌子	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県

名称(評価方法開発検証チーム)			
氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
島田 英昭	信州大学学術研究院教育学系・准教授	評価方法開発検証 チームリーダー	長野県
工藤 洋路	玉川大学・准教授(関東甲信越英語教育学会マルチメディア委員会委員長)	パフォーマンス評価の開発と 分析	東京都
鈴木 渉	宮城教育大学・准教授(言語科学学会運営委員・東北英語教育学会福島支部事務局)	多面的な評価方法の開発と 分析	宮城県
高見澤 益子	軽井沢町立軽井沢中学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県
三井 由美子	木島平村立木島平中学校・教諭	拠点校の研究推進	長野県
中澤 俊樹	長野県軽井沢高等学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県
今井 直哉	長野県蘇南高等学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県
荒井 宏	長野県白馬高等学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県
佐藤 大樹	信州大学教育学部 附属長野中学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県
宮下 昌子	信州大学教育学部 附属松本中学校・教諭	拠点校での評価実施	長野県

名称(研修会運営チーム)			
氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
谷塚 光典	信州大学学術研究院教育学系・准教授	研修会運営 チームリーダー	長野県
金子 史彦	信州大学学術研究院教育学系・准教授	研修会の運営・設営	長野県

名称(外部評価委員会)			
氏名	所属・職名	役割等	都道府県名
竹前傳藏	信濃教育会雑誌図書編集部部長 (前須坂市立須坂小学校・学校長 長野県英語教育研究会会長)	中学校英語教師を中心とする研究会の会長として、中学校における指導方法の抜本的改善が適切かを評価する。	長野県
内堀繁利	長野県教育委員会事務局 高校改革推進参与 (長野県高等学校英語教育研究会 会長 前長野県上田高等学校・学校長)	高等学校英語教師を中心とする研究会の会長として、高等学校における指導方法の抜本的改善が適切かを評価する。	長野県
竹内理	関西大学・教授 (外国語教育メディア学会前会長)	英語教育及び英語力評価の専門家として本事業の検証方法が適切かを評価する。	大阪府